一つの聖書と宗教から、いま世界のあらゆる霊的問題に火がついた

Greatchain
February 9, 2024

ユーチューブを利用される方は、この問題に気が付いておられるだろう。この話題はますます大きくなっている。結論から言うと、秘密を隠せなくなることはよい方向だと思う。この宗教教団の名前は言わないことにする。毛嫌いする人が多いが、私と妻は、どんな話でも聞いてみることにしているので、彼らは我々の知人でもある。これらのユーチューブを書く人には、聖書や宗教について、よく知り聡明な人が多いことも驚きである。その一人が、人を批判するときには、まず敬意を払えと言っているので、私もそれに従うことにする。私の知る限り、信者たちに悪人や傲慢な人間はいない。

まず、我々が謙虚にならねばならぬ理由は、聖書が難解で安易な解釈ができないということである。そこで、こういう話題をもち出す以上、私自身の大まかな宗教観を述べておくのが筋かと思う。私は勿論、無神論者ではないが、特定の宗教に偏ることを極力、避けて生きていて、いわゆる信者ではない。

そう言った上で、世界の有神論すべての本質を言い表す、最も有用で「有難い」言葉は、「**分け御霊**（みたま）」だと考えている。これは「どんな人であろうと、必ず（見えない）創造者の一部を分け与えられて生きている」という意味で、これは私を百パーセント満足させる。そして押し付けはしないが、あらゆる人がそう考えるべきだと思っている。なぜそう思うか？　それは、そう自覚することで：――**生きることの責任とその喜び、神による永世の保証、物や子孫を創り出す喜び、生きる目的と私の存在の価値、**そして特に、**（受動的でなく）能動的に生きるという生き方**を与えてくれるからである。この表現の中に、あるべき宗教信仰のすべてが煮詰められて存在する。「神、聖霊、イエス（三位一体）」というキリスト教の表現も同じかもしれないが、神に協力して生きるという、最も重要な契機がそこからは欠けている。

多数のユーチューブによれば、この宗教の人々は、間違った聖書を与えられ、秘密主義の教団の幹部に騙され、搾取されて信仰生活をしており、命令に服従しない者は厳しい迫害を受けていると言われ、脱会する人々も後を絶たないようである。しかしそれを言うのが

私の目的ではない。ただそれを言う人は、私の見る限り、ほとんど信仰者の立場に立って同情しているのであって、信者への悪口はないと思う。

しかしこの教団が、全体として一つの病気を患っていることは否定できない。そしてそれは、彼らの常識を超えた教義と、彼らの用いる歪められた聖書から発している。私はここでも伝聞による知識は使わず、彼らの「新聖書」だけを使うことにする。ユーチューブでざっと見たところ、彼らを批判する人たちの問題にする聖書の箇所で、最も多かった（5, 6 か所？）のは、「ヨハネ 1・1」だと思う。我々が普通に用いる「欽定英語訳聖書」では、そこは In the beginning was the Word, and the Word was with God, and the Word was God …と書かれているが、彼らの「新聖書」では、最初の the Word が **a word** となっており、その日本語訳は「**初めに言葉と呼ばれる方がいた**」となっている。ここは我々の知る通り「**初めに言葉があった**」でなければ意味が通らない。このように改ざんする意味がわからず、そもそもこれは日本語ではない。

しかし、少し考えるとその意図がわかってくる。彼らは、最初に、形をもたぬ霊としての神でなく、人間の形をもつ神を要求しているのである。しかし、ここで旧来の聖書が「言葉」といっているのは、形をもたない「ロゴス（理法)」のことであり、現にそれがギリシャ語原本に使われている語だと言われる。ではなぜ、この教団の責任者たちは、何のために、わざわざこのような、**狡い**すり替えを行ったのか？　実は、この「何のために」という言葉が最後までついて回る。

彼らは何ゆえか、霊的な神の存在を拒否している。ここでもっと初めの「創世記」の書き出しを比較してみよう。旧来の聖書はこう言っている：――「初めに神は天と地を創造された。地は形なく、むなしく、闇が淵のおもてにあり、**神の霊が水のおもてを動いていた**。」彼らの「新聖書」は、これを大胆にも書き替えて、「初めに、神は天と地を創造した。地は荒れていて何もなかった。深い水の上に闇があった。**神が送り出す力が水の上を動いていた**」としている。

ここは、普通に聖書を読む人々は、「神の霊」Spirit of God は外せないと考えるだろう――「最初にあった言葉」と同じように。彼らの訳はそうでなく、何か物理的現象の説明ように聞こえる。これは私の想像では、現実に、唯物論的に宇宙の創造を説明する人々の影響ではないかと思う。唯物論者たちは宇宙創造を説明するのに、最初に完全な静止（平衡）状態があったが、そこへ偶然、重力のムラが生じ、それがきっかけとなって、宇宙が次々と動き出し、今日の宇宙ができた、と言っている。「新聖書」の天地創造の記述は、それに似ているではないか？

もちろんこれは、ただの 2 例であり、彼らの大規模な宇宙創造の努力は、宇宙から「霊」を追い出すための、必死の辻褄合わせだったと考えてよい。この類の事例をユーチューバーたちは，根気に一つひとつ指摘しており、私も、聖書の記述の中に、霊や霊界の存在が出てくると、必ずこれが修正されていることに気づいている。一つだけ例を示そう：――「ルカ、16・23」に「そして黄泉（よみ）にいて苦しみながら、目をあげると、アブラハムとそのふところにいるラザロとがはるかに見えた」とある。ここを彼らは、「**そして墓にいて苦しみながら**…」と修正している。黄泉にいて（死んだ状態で）苦しむことはない、というのが彼らの教義の重要部分であって、これを私は何度も反論したが、ついに聞いてもらえなかった。死ねば終わりというのは、あまりにも世界と歴史の常識に反するではないか、と言っても、これは絶対許せない一線であるらしい。

彼らのくれた教義解説の小冊子には、こう書いてある：――「み言葉は**聖書の中で**、死者の状態を説明しておられます。その教えは明快です。つまり人は死ぬと存在しなくなるのです。死は命の反対です。死者は見ることも、聞くことも、考えることもしません。体が死ぬとき、人の一部分といえども生き残ることはありません。人間は不滅の魂や、不滅の霊をもっていないのです。」

これは、人は生まれたら絶望して死ぬしかない、という意味に普通の人は取るだろう。単刀直入でわかりやすい。あまりにわかりやすい。確かにドーキンズのような筋金入り唯物論者ならこう言うであろう。またサタンがこう言って人間を嘲笑するのならわかる。しかし、どうしてもわからないのは、これが人々を救い、生きる知恵を与えるはずの宗教の教えだということ、そしてかなり多くの人々がその信仰をもち、これを説いて回っていることである。彼ら例えば、「私は守護霊を信ずる」と言えば、それは間違いだと言い、「自分たちの教団ではそれは認めません」という言い方をしない。

何のためにそれを主張するのか？　何か得をすることがあるのか？　これは宗教界の大きな問題に発展するのではなかろか？　そんなものは宗教の皮を被った悪人どもの所業だとか、彼らは単に騙されているのだ、といって一蹴することはできないと思う。これをきっかけにして、他の宗教や聖典への厳密な見直しが始まるのではなかろうか？　またこれは、我々全体の霊的レベルの問題でもある。聖書は我々を拘束するのでなく、霊的に成長させる健康を与えるものでなければならない。ただ我々の懸念は、この事件の背後に、他とつながった極悪人がいるのではないか、ということである。